

# 安全管理セクション レポート

## ①はじめに

二日間にわたり自らの安全と生活を自律して維持することに、OMMの精神があります。これは、自然の中で自らの進路を決めてフィニッシュを目指すナビゲーションスポーツだからです。プログラムの「安全の確保」の項目に、「大会主催者は競技者が2日を通じて競技ルールに則り行動すれば自らで対応可能なコースを設定しています」とあります。主催者と参加者が協働して自然の中のリスクに挑戦する。そこにOMMにおける安全管理の基本的な考え方もあります。

安全管理セクションでは大会の理念の元に、レース前に想定されるリスクを評価し、それに応じて対応するとともにイベント中のトラブル・事故等への対応を行ってきました。3回目となった昨年は、レースを終えた皆さんにイベントのリスクやそのマネジメントに関するアンケートを実施しました。その結果、61という数の回答が集まり、この課題に対する皆さんの関心の高さを知ることができました。その中には私たちと考えを共有する意見もありましたし、必須装備について私たちも気づかなかった指摘もありました。OMMのスタイルを貫き余計なリスクマネジメントをせず、参加者の必要スキルの呼びかけを徹底してほしいという声が印象的でした。OMMの安全管理の考え方について、かなり多くの参加者が賛意を表明してくださいました。その一方で、多様な考え方も見られました。

今大会のフィニッシュ後の装備チェックでは、必須装備の不携帯(特にレース中に落とすこと)や、ペアの分離など、安全管理上重大な問題も少数ながら見られました。今後も、「なぜ、ルールがそうなっているのか」、という点について、参加者と一層の共有が必要だと感じました。

## ②安全面についてのレースの概況

心配された初日の雨もレース時にはほぼ回復しました。気温はやや低かったものの、よいコンディションだったと思います。このため、事故やトラブルはほとんど見られず、イベント後の救護所の利用も6件ほどでした。歩行困難な程度の捻挫と骨折につながったと思われる打撲も1件づつ発生しています。二日目に17時を過ぎたフィニッシュがあったものの、概ねスムーズに競技を終了しました。

競技の公正のため、フィニッシュ後の装備チェックを行いました。装備についての工夫を見ることは、安全管理セクションとしても参考になりますし、楽しいものでした。「異次元の軽さ」のチームもあれば、縦走登山ができそうな重装備のチームもありました。重要なことは重量ではなく、自らの安全を守るために十分な装備かという点と、それを十分考慮したかという点です。

## ③安全上の課題

今回のフィールドでは、急斜面での滑落や落石、地面にある落とし穴のような窪み、悪天候の時の低温などが重大なリスクとして事前に指摘されていました。これらについてはコース設定責任者とは別に安全管理セクションでの確認を行いました。その結果、地図に示される斜面の立入禁止が設定されました。また直前の確認により、斜面沿いの林道の立入禁止措置を設定しました。実際この林道では、参加者の至近でキャリーバッグ大の落石が発生しています。落石のリスクについては、日本の多くのフィールドで常にあることへの意識が、主催者・参加者ともに必要です。

参加者の行動面では、競技規則からの逸脱も散見されました。その多くは、競技中の装備紛失とチームの分離でした。必須装備を持つこと、二人一組の競技であること、がリスクをコントロールする上でどのような役割を果たしているかを今一度ご確認ください。主催者として残念なことではありますが、これらのチームについては競技規則に則り失格と致しました。

## ④おしまいに

日常生活の場では、法律や倫理感によって安全が守られています。また、日本では事故に対する管理者の安全配慮義務が強いので、施設管理者や行政はリスクの存在に非常に敏感です。それは私たちの安全を守ってくれる反面、私たちが他者にリスク管理を委ねてしまいがちです。しかし、自然の中ではリスクが十分管理されるとは限りません。その中で活動する時、自らリスクに対して準備し、自然の中で健全な判断力を持って対応する必要があります。参加者もリスクに対して協働することを求めるOMMが、皆さんが自然の中のリスクと向き合う経験の場となれば幸いです。